ヤング・ギター2026年12月号増刊
2026年10月28日発行・発売　第58巻・第24号・通巻945号

Jaz. in

December 2026 Vol.
037



Special Issue

Keith Jarrett

録音50周年 キース・ジャレット前人未到の最高傑作『サンベア・コンサート』の足跡を訪ねて

即興芸術の極致を刻む初登場作品『ローマ』&Blu-ray4作品

新連載 ダンモ・クロニクル ～早稲田大学モダンジャズ研究会の過去・現在・未来

最後のセッション――Body & Soul 伝説が幕を閉じた日

デトロイト・ジャズ・フェスティバル2026現地レポ

A Celebration of the Life and Music of Sonny Rollins
ニューヨーク現地報告　ソニー・ロリンズ, その人生と音楽を祝う

マッチでみるジャズ喫茶100年の歴史

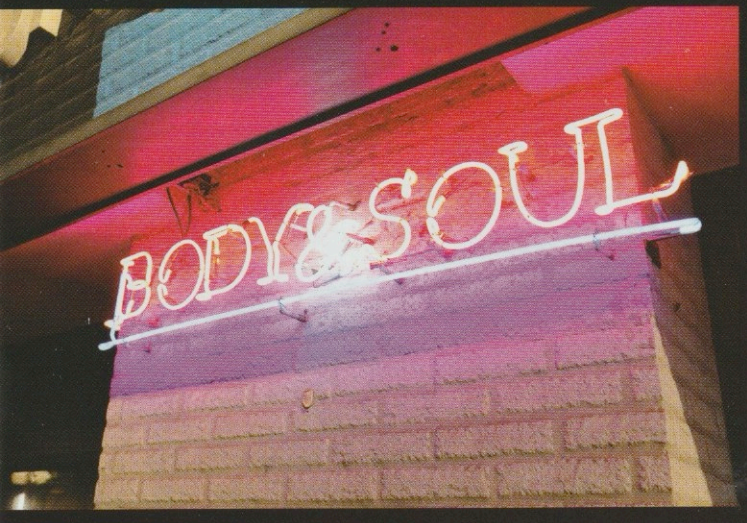
THE MILES ELECTRIC BAND メンバーが語るマイルスの真実

Interviews
ユッコ・ミラー　エスペン・バルグ　マッシモ・ファラオ　大野圭子＆穂積翔太　金丸正城　三槻直子
クラウディオ・ヴィニャーリ　早川岳晴　ショーン・メイソン　近藤香織　三上麟太郎　&more



最終日の2ndセット，大トリを務めるTOKU(vo, flh)と山本剛(p)グループらによる感動のパフォーマンス。超満員の店内に熱い手拍子と歓声が響き渡った

最後のセッション——「BODY&SOUL」伝説が幕を閉じた日



2026年9月26日，日本を代表する老舗ジャズクラブ「BODY & SOUL」が52年の歴史に幕を下ろした。歌舞伎町から始まり，六本木，青山，そして渋谷へと場所を変えながら，数々の伝説的セッションと名手を育んできたジャズの聖地である。雨が降る閉店の夜，名物オーナー・関京子ママとゆかりのミュージシャン，そして超満員のファンが結集。愛と熱気に包まれた大トリのラストステージと，感動のラストセッションを熱く記録する。

高橋慎一●文／写真

2026年9月26日。東京は記録的な長雨が先月末から続き，この夜もそぼふる雨が渋谷の街を残暑の倦怠と共に包み込んでいた。

この日，日本を代表する老舗ジャズクラブ「BODY & SOUL」が52年の歴史に幕を下ろした。ライブの1stセットが終了し，いよいよ最後のステージとなる2ndセットが開始となる入れ替え時，店の外は雨に濡れることも気にしない観客で溢れ，大変な賑わいとなっていた。

当夜の出演アーティストは“TOKU with 山本剛グループ”。この店を愛し，共に歴史を作り上げてきた，大トリのライブを飾るにふさわしいアーティストだ。フロアでは常連と思わしきファンと出演メンバーが，今日の日を惜しむように交歓する姿が見える。

1stセットのライブの余韻に浸り，去り難く店の外観を見つめ談笑に興じる観客たちを見送るため，名物オーナーの関京子さんが店外に出てくると，たちまち多くのファンに囲まれ記念撮影タイムとなった。

伝説のオーナー関京子と「BODY & SOUL」が歩んだ61年

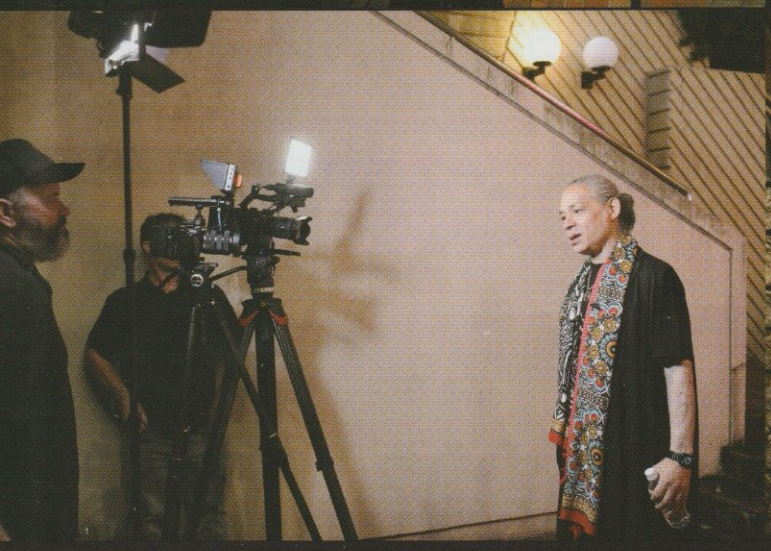
東京のジャズシーンに京子ママありと謳われ，多くの関係者や大物ミュージシャンが畏敬の念を持って接する存在である京子さん。「BODY & SOUL」は彼女が人生を賭して作り上げ，守り通し，50年以上の歳月を経てジャズの聖地となった。

京子さんが「BODY〜」の前身となるジャズクラブ「タロー」を新宿歌舞伎町にオープンしたのが1965年のこと。当時弱冠25歳の彼女は，同店の経営を通して若き日の菊地雅章や日野皓正らと交流を持つこととなる。

1974年，同じく新宿の百人町でジャズ喫茶「BODY & SOUL」を開業。現在同店の看板やコースターに記載されている“since 1974”はこの開業を起点にしているが，「タロー」での営業を含めれば，京子さんは52年どころか61年もの間ジャズクラブオーナーとして活動してきたことになる。3年後の1977年にはピアノバー・スタイルに業態を変えた店舗を六本木交差点に開き，当初はグランドピアノ1台だった店内は，やがてドラムセットとベースアンプが置かれ，ミュージシャンたちのジャムセッションが









上左／2ndセットの開演前，店の外に集まった大勢のファンと温かい言葉を交わすオーナーの関京子さん
上右／雨がそぼふる最終日の夜，2ndセットの開演を前に「BODY & SOUL」の看板の下に集う人々。渋谷公園通りで最後の熱い演奏が始まろうとしていた
下左／店の外で海外の取材クルーのインタビューに答えるTOKU
下右／1stセットの熱気と名残を惜しむ観客の余韻により，予定時間を大幅に変更してスタートとなった2ndセットの案内表示

自然発生すると共にライブハウスへと変貌してゆく。

1985年六本木交差点の店舗を大改装し，本格的なジャズクラブとしての活動を開始する。と同時に海外からのアーティスト招聘やNYのジャズクラブでの新人発掘視察旅行を経て，日本のみならず海外ジャズミュージシャンの間でも「BODY～」の存在が浸透し，“来日公演の際には必ず寄らねばならない場所”として認知され出す。1991年に店舗を北青山に移し，翌年には南青山に移転。この頃になるとブルーノート東京に出演するジャズジャイアンツと京子さんが旧知の間柄となっており，本場NYでも実現困難なアフターアワーセッションが繰り広げられる事も。同時に若手日本人ミュージシャンの発掘にも注力し，クロージングライブの大トリを務めたTOKUを筆頭に，小沼ようすけ，秋田慎治ら多くの奏者が若手時代の「BODY～」への出演をきっかけに世に羽ばたいていった。

2021年，前年から続くコロナ禍によるライブハウス文化の停滞を打破するように，店舗を渋谷へと移転。南青山時代の隠れ家的雰囲気から一転，再開発が進む巨大都市・渋谷の公園通りに新店舗が誕生し，夜毎熱い演奏が繰り広げられていた。

涙と歓喜が交錯するラストステージ— TOKUと山本剛が刻んだ魂の演奏

公園通りに「BODY～」が移転してから早5年，最期の姿を見届けようとする観客でフロアは立錐の余地もないほど埋め尽くされた。本誌の取材担当として現地入りした筆者も，撮影の動線を確保するのが困難なほどの混み方だ。

京子さんの挨拶と共にTOKUと山本剛トリオが入場すると，場内は暖かい，熱のこもった拍手と歓声に包まれた。オープニング曲は〈My Foolish Heart〉，抒情的な旋律を山本が深く繊細につま弾くと，その演奏の体温に呼応するかのように，TOKUが情感を込めて耳に馴染んだ旋律を歌い上げてゆく。

超満員の観客に向け，TOKUがMCでひと事「今日は心がざわついている」と語った。消えゆくこの場所への，彼の偽らざる複雑な思いの乗った言葉を聞き，客席にいるこちらの身も引きしまる。

２曲目は盟友・石崎忍をステージに招き入れ，アルトとフリューゲルホルンの2管による〈Cool Struttin'〉。場内の空気を一

最後のセッション——「BODY&SOUL」伝説が幕を閉じた日



熱いステージを終え，万感の思いを込めて抱き合うTOKUと山本剛。鳴りやまない拍手が最後の夜を彩った

鳴り止まない拍手と歓声の中，最後のステージで観客とミュージシャンへ感謝のメッセージを語る関京子オーナー



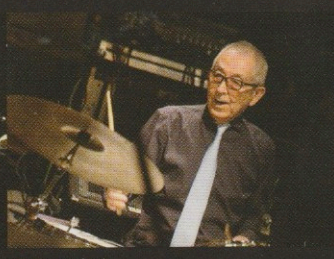
気に高揚させる。石崎との熱い1曲を終えると，TOKUが「BODY～」に初出演した時の様子を，茶目っ気たっぷりに語り出した。「1998年に，彼（石崎）に連れられて初めてここに来た時は，とにかく敷居の高いジャズクラブだって印象を持っていたから，ひどく緊張してた。京子ママに挨拶し，当日の出演者だった山本（剛）さんが，演奏中僕をステージにシットインさせてくれたんです。無我夢中でプレイしてステージを降りると，京子ママがいきなり“ねえ，あなた3月23日は空いてる？”と聞いてきたんです。何をいってるのか意味がわからずキョトンとする僕に，京子ママは“仕事の依頼よ！”と語ってきて。そこで僕はようやく，出演依頼だ，って気付いたんです（笑）」

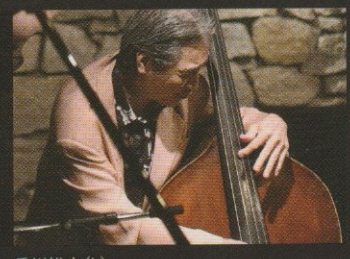
この場所での演奏で注目され出したTOKUは，2000年にメジャーデビューを果たす。ちなみに筆者は，同年に「BODY～」で行われたTOKUのデビュー記念ライブの撮影も担当した。あれから26年，かつての勢いに満ちた若きプレイヤーが，今や日本を代表するジャズミュージシャンとして大トリの演奏を務めている。大御所となったTOKUの姿をファインダーでとらえる度，筆者も深い感慨に見舞われた。

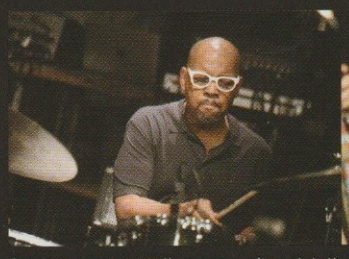
この店への出演のきっかけを作ってくれた先輩，仲間と共に，思いが溢れるラストステージを展開するTOKU。いつもはご機嫌なプレイが信条の山本剛が，今夜だけは感情をむき出しに，涙で顔を歪めながら最後の打鍵をピアノに刻んでゆく。ソロを終

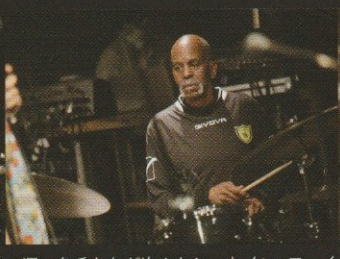

TOKU(flh,vo)と石崎忍(as)


山本剛(p)

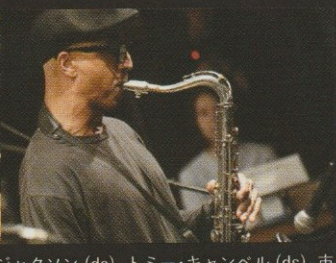

大隅寿男(ds)


香川裕史(b)








「BODY & SOUL」最後のステージに，ゆかりの深い名手たちが次々とシットイン，ファイナルステージに華を添えた。左からジーン・ジャクソン(ds)，トミー・キャンベル(ds)，市川秀男(p)，レイモンド・マクモーリン(ts)

え，男泣きに泣く山本の姿に，筆者も思わずもらい泣きしてしまった。

「私にとってここは“音楽をやってる感じ”がするところ。自分のホームグラウンドとしてしっかり音楽に取り組めた場所なんです。この場所でこんなに長く演奏させてもらえて，私は幸せ者です」

そう語る山本の表情には，拭いきれぬ寂しさが漂っていた。

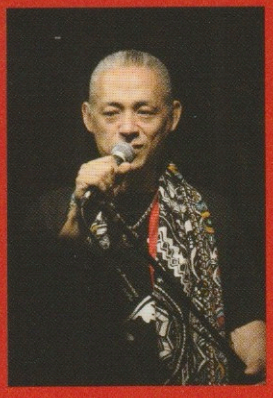
その後は大ベテランの市川秀男が飛び入りし，山本に代わって衰え知らずの情熱的なピアノを披露すると，ジーン・ジャクソン，レイモンド・マクモーリンら最強の助っ人外人が次々とステージイン。興奮が最高潮に達すると，日本のジャズファンにはおなじみ，トミー・キャンベルが登場。現在ニューヨークで活躍する彼は，この店の閉店を知るとプライベートで来日し，ステージに飛び入りして情熱のドラムを鳴り響かせた。

終演後，止まぬ拍手と歓声の中，TOKUも山本も涙を拭っている。そんな中，一番の大ベテランである大隈寿男が，柔和な笑みを浮かべドラムセットから二人を見守っている。なんと美しいラストライブだろうか。興奮醒めぬステージへ，TOKUが京子さんを招き入れ，長年この店を守り続けてきたオーナーによる最後の挨拶が始まった。

「皆さま，今日はどうもありがとうございます。私はこんなに素晴らしいミュージシャンと，いつも一緒にいるんですよ。毎晩，取っ替え引っ替え，羨ましいでしょ(場内笑)。私は今，86歳になりますが，52年間毎日，ジャズが好きでやってこれたのは，ミュージシャンとお客様がいらっしゃってくれたからです。本当に幸せな人生を送ってきたと思います。皆さま，本当にありがとうございました」

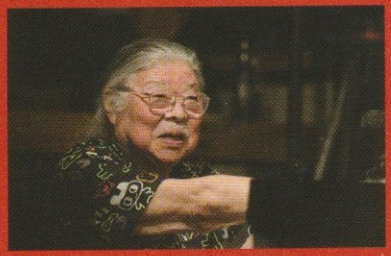
力強く語る京子さんのラストメッセージは，湿っぽさとは無縁の清々しさに貫かれていた。大団円で歴史を閉じた「BODY～」，ここがいかに素晴らしい場所だったか，我々が語り継いでゆかねばならない。

感謝と情熱を胸に大トリを務めたTOKUが語る，『ボディ＆ソウル』への思い



「『ボディ＆ソウル』の閉店が決まった時，僕は心の中で『ここでのラストステージは山本剛トリオ，そして石崎忍と共演する』と決め，出演を打診しました。最後の週末がまだ空いていて，京子ママからも『TOKUならいいよ』と言っていただけて大トリを任されることになりました。今日のライブは僕にとっても，観客の皆さんにとっても，特別な思いが詰まったステージになったと感じています。僕にとって『ボディ＆ソウル』は音楽的な“実家”のような場所です。家にいるような安心感がありつつも，演奏においては一切の妥協が許されない緊張感が同居していました。MCでもお話ししましたが，京子ママから突然出演の打診をいただいて以来，四半世紀以上にわたってこのステージに立たせてもらいました。時に意見のぶつかり合いもありましたが，それもジャズに真摯に向き合って互いに正直な気持ちで語り合えていたからこそだと，今改めて感じています」

ラストステージを終えた山本剛が語る，関京子ママとの半世紀と『ボディ＆ソウル』の真価



「『ボディ＆ソウル』のオーナーである京子さんとの関係は，僕が六本木にあった名店『ミスティ』のハウスピアニストとして務めていた頃に遡ります。京子さんはお客さんとしてお店に来てくれて，ステージを終えた後は二人で朝まで酒飲んだり，随分一緒に遊びました。時代は70年代初頭，お互い若かったですから何度も喧嘩しましたよ。77年に『ボディ～』が新宿から六本木交差点に移転した時に，お店の業態がジャズ喫茶から本格的なライブハウスに変わり，それ以来ずっと出演しています。他のハコと『ボディ～』の違いはオーナーの個性です。このハコは間違いなく京子さんの感性で作られていました。彼女のオーナーとしての凄さは，何と言っても若手に場所を与え続けたこと。ここから何人ものミュージシャンが羽ばたいていったでしょ。その歴史はしっかりと語り継いがないとね。私もこれから，毎日しっかり生きてピアノを弾き続けて行きますよ！」